様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ２９ 日現在

機関番号：３０１０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００２８５

研究課題名（和文）柳田国男の表現構造がもつ現代的意義の発掘―言語観・文章構成・同時代状況への関与―

研究課題名（英文）Discovering the Contemporary Significance of Kunio Yanagita's Representative Structure: Linguistic View,Text Structure,and Commitment to Contemporariness

研究代表者
宮崎　靖士（MIYAZAKI, YASUSHI）

北星学園大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：１０４３８３５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：令和元年度までに資料調査をできた範囲内での成果となった。検討の過程では、柳田国男における言語観および表現構造に関する検討成果を活用し、そのうえでそれらを具体的なテキスト検討に集約させた。その結果、『先祖の話』、および『豆手帖から』『秋風帖』『海南小記』の表現に関する共通した特質として、次の点を明らかにすることができた。それは、テキストに記述された内容やテーマに関して、書き手の記述だけで完結するのではなく、読み手の能動性が発揮される余地を保ち、読み手に思考と発話の主導権を譲りつつこれからの実践につながる思考の当事者となるよう促す点であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
上記の成果がもつ学術的および社会的な意義については、次の三点をあげられる。第一には、柳田のテキストに関して、その内容と不可分なものとして形式面の検討を行うことの意義を提示できた点。第二には、柳田のテキストの検討を通じて、文学研究の視点や方法論を、従来別分野と理解されてきた著作家のテキストに適用することで新たな価値を見出せることを示した点。そして第三には、柳田のテキストがもつ現代的意義の基盤を、書き手の意図の反映として完結させない文章の作り方に求められることを示した点である。

研究成果の概要（英文）：The study results are based on materials examined up to 2019. The results of the analysis of Yanagita's linguistic view and representative structure were summarized and applied to an examination of individual texts. As a result, the following was discovered as a shared characteristic among the representations of “Senzono Hanashi”,“Mame Techo Kara”, “Shufu Cho”, and “Kainan Shouki”. The writer does not complete the content and themes of the texts with his descriptions only but allows readers to read the texts actively, gives them the initiative in thinking and speaking, and encourages them to become active thinkers who will undertake future tasks.

研究分野：日本文学

キーワード：柳田国男　表現構造　現代的意義　言語観　先祖の話　豆手帖から　秋風帖　海南小記

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

柳田国男が卓越した表現者であり、その文章により 1930 年代以降に日本民俗学という学問分野を立ち上げたことは周知である。そして特に戦後においては、数多くの著名な文学者や思想家が、日本の近代を相対化し得る視点を確保する拠り所として柳田の論説を自らの活動に取り入れてきた。例えば、三島由紀夫、桑原武夫、橋川文三、吉本隆明、花田清輝、柄谷行人等である。しかしそこで主に注目されてきたのは、柳田国男の著作で述べられている事柄(＝内容)であり、一方でその内容を支える形式、即ち表現面における機構や特質については、時にそれに部分的かつ印象論的にふれられる程度であったといえる。そしてその傾向は、折口信夫や民俗学研究者による柳田への注目においても同様といえる。

そこで柳田国男の活動を遡ると、彼は日本近代文学の基本的なありようを決定した自然主義文学の成立期に、その中心作家を主導しつつ自らは文学を離れ、「経世済民」という言葉に集約される現実世界に効力をもつ文筆活動を指向しながら文学批判を展開した表現者であった。すると柳田国男は、自らの言葉による現実への働きかけを、自然主義以降の「文学」のメカニズムを十分に理解しつつ、「文学」ならざる形において展開した表現者として理解されるべきではないか。そしてそのような対象の検討は、現在の日本文学研究が抱える限界を超える突破口となり得るのではないか。そのような「問い」から本研究はスタートした。

なお、研究開始当初における柳田国男に関する研究成果としては、主に柳田の活動を追跡した岡村民夫『柳田国男のスイス』、佐谷真木人『民俗学・台湾・国際連盟』や、テキスト内容の分析を主眼とする佐藤健二『柳田国男の歴史社会学』、石井正己『テクストとしての柳田国男』、柳田国男研究会編『柳田国男の学問は変革の思想たりうるか』、小林隆編『柳田方言学の現代的意義』、更には海外の研究者による論集であるＲ・Ａ・モース編『世界の中の柳田国男』等が注目された。それらに共通するのは、今日の社会状況や学問分野が抱える多様な要請に今なお有益な指針を与え得る源泉として柳田をとりあげる点であった。本研究は、そのようなスタンスを共有しつつ、しかし、テキストの形式面へ注目する表現分析を中心とする点において、非常に独自性が強いと考えられた。

また、申請者はこれまで、近現代に日本語で書かれた文学作品を中心としつつ、更に日本語学の論説や民俗学に関わる言説までを対象として、その表現分析と表現がもつ同時代状況への働きかけ方の検討をしてきた。その過程で、近年、柳田国男のテキストに注目し、特に初期三部作（『後狩詞記』『遠野物語』『石神問答』)、『山島民譚集（一)』、『蝸牛考』に関して、次のような共通の特質を発見した。それは、一見錯綜し非論理的な記述とみなされ得る行文が、テキスト中の分節単位（章、節や小見出し）を基準として要約した上で見直すと、読み手をテキストで論じられる事柄に対する当事者としていくという目的に従った合理性をもつことである。そこから申請者は、柳田国男のテキストの基軸として、行文の展開や論点の配置が予め整序されておらず、ただしそのことが読み手の側にその行文を読み進める過程で対象に関する知識と俯瞰的な視点を獲得していくことを促すという機構を想定し、本研究を構想するに至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、以上のような視点から、柳田のテキストを対象とし、そこに示された言語観と、その具体的な展開であるテキストの文章構成を検討することで、柳田のテキストがもつ表現面における機構と特質、更にはそれがもつ意義までを明らかにする点にあった。

柳田国男の著作については、柳田が東京帝国大学を卒業し農政関係ほかの著作を発表しはじめる 1900 年頃から、アジア太平洋戦争の終結期までに発表された論文、著書を対象とした。検討時期の下限をそのように設定した理由は、1945 年に柳田は 70 歳を迎え、その著述における方法や方向性はその時期までにほぼ完成されると考えたからである。また検討に際しては、言語観や表現面の特徴を顕著に示すと考えられるテキストを取り上げた。その上で、そこで見出される特質が柳田の著作において一般性をもつか否かの検証を伴いつつ、既に見出した特質の再検討や細分化も必要に応じて行った。それは、活動期間が長く、テキストの数やそこに認められるジャンルも多い対象を、包括的に、同時に研究期間内で出来るだけ効率的に検討するための工夫であった。

なお本研究は個人研究として申請をした。その理由は、この研究に関して、単に関連領域の研究者を集めて検討した場合、既成の学問分野の視点と方法論の再生産となると同時に、まとまった方向性をもつ成果を提示し難いと考えたためである。まずは個人研究の形で検討を深め、今後にむけての基盤整備までを果たすのが有益だと考えた。

３．研究の方法

本研究では以下の（1）から（3）の検討を行い、それらの検討成果を総合した。以下、検討の具体的内容を研究年度ともあわせて記載する。

（1）言語観について

この作業は平成 30 年度を通じて行い、その後も必要に応じて補足調査を続けた。以下の二つのトピックを検討し、続く(2)、(3)で検討する事柄の基盤を強固にすることを試みた。
①表現の定型に関して
柳田における言語観（に関わる記述）を通覧すると、その活動期間内で最も鮮やかな対照を見せているのが、この点に関するスタンスとなる。柄谷行人や井口時男は、主に柳田の明治期における活動、及び戦後における回顧的な文章を論拠として、柳田が定型を重視する表現者であったことを述べた。しかし柳田は、特に 1930 年代に、定型表現を排することで自らの意思を表現することをよしとする主張を「国語史論」等で展開しており、その背景には「公民育成」という問題意識があった。そのように一見すると正反対となる定型表現へのスタンスについて、それを詳細に確認するとともに、下記(1)の②との接点を明確にすることまでを行った。
②「考える言葉」に関して
これは、上記の対照が生じる 1930 年代に、国語論、方言論、国語教育論の中で、「話し言葉」「書き言葉」とは別の範疇として繰り返し柳田が提示したものである。ここでは、柳田が述べる「考える言葉」の内実、及びそれを重視した背景を明らかにし、更に(1)の①で記した定型表現との関わりを検討していく。その上で、ピアジェやヴィゴツキーを中心とし、1930 年代から展開された教育学、言語学、発達心理学における「内言」（＝心の中の言葉）の研究動向等を参照し、柳田の言語観がもつ、従来見逃されてきた重要な側面を明らかにしようと試みた。

（2）表現構造について
この作業は平成 31 年度の当初からはじめ、令和 2 年度の前半期まで行った。ここでは、以下の二つのトピックを検討した。
①枠組みの作り方
これは、章、節もしくは文中の見出しという形をとる、論説中での分節のしかたに注目する検討である。ここではまず、明治後期の『遠野物語』等に認められる分節の傾向と、自然主義小説における構成方法（章立て）との対照を論説と小説の違いという点にも配慮しつつ行った。そこから、自然主義小説における、全ての出来事が終わった時点から俯瞰的に整理し章立てを行うという発想とは異質である、対象について十全な情報をもっているのではない読み手とともに、いわば思考の発展プロセスをともに歩むことで、最終的に対象に関する知識・視野を得ることを促す柳田の傾向までを明らかにした。更に、そのような見解の妥当性を検証するために、柳田が閲覧したとされる近世期の文献や、海外の文献における章、節の作り方についても、柳田文庫、内閣文庫等で可能な限り調査をし、比較することを試みた。ただしこの作業は令和 2 年当初からのコロナ禍により、当初の調査予定の範囲を完遂することができなかった。
②；個々の文章のレベル
こちらは、章、節の中に目を向け、そこにおける主題と考えられる文や情報がどのように定位されているかを検討するものである。具体的には、話題の選択、配列や文体、及び細部にわたるレトリック、文章のリズムにまで至る検討となり、その傾向についての類型化までを目指した。なお、検討対象としては、『遠野物語』等の明治後期のテキストに加え、更に、大正期、昭和初年代、昭和 10 年代のテキストからそれぞれ何点かを取り上げ、そこにおける特徴を確認することで、検討結果の妥当性と一般性を確保すべく努めた。

（3）同時代状況への関与について
この作業は令和 2 年度から着手し、上記(1)、(2)の検討で得られた成果を総合しつつ、それが同時代状況への如何なる関与たり得ていたかを、具体例をあげて検討した。特に、柳田の論説の中でも最も先鋭的に時代状況と切り結び、かつ現代的意義をも見出し得るものとして『先祖の話』に集約される固有信仰論を検討した。そこでは、柳田が自説からの差異付けを試みていた対抗言説を確認し、それをも含む同時代状況への関与において、上記（1)、(2）で検討した言語観、文章構成がどのように機能しているかを検討した。更に別の論考として、1920～21 年にかけて『朝日新聞』に連載された『豆手帖から』『秋風帖』『海南小記』の分析も行った。本研究では、柳田が全国紙というメディアにおいて、自らのその後の執筆活動における文体や方法を模索した痕跡としてそれらを理解できるという立場にたち、そこで展開された種々の試みを分析した。そのような作業を通じて、言語がもつ力の根源に関わりつつ、読み手を動かすことから現実の改変を図ろうとした柳田の試みを浮き彫りにするとともに、今後の文学研究に対する新たな視点の提示までを試みた。

４．研究成果
令和元年度までに資料調査をできた範囲内に限定し、そのうえで検討成果を具体的なテキスト検討に集約させる形での成果となった。第一の成果として、柳田国男が 1946 年に発表した『先祖の話』を対象とし、それを表現論の観点から分析しつつ、同時に同時代状況との関連をも視野にいれることから、テキストの価値と可能性を発掘した検討があげられる。表現に関しては、特にテキストの構成と文体の特質に注目し、同時代状況については、特に「神道指令」に代表される神道に対する諸政策と、旧家族制度をめぐる民法改正に関わる動向に注目した。そのような検討の過程では、令和元年度までに行った資料調査の結果も反映させることができるように努めた。特に文献資料への柳田のスタンス、および柳田における基本的な言語観にもとづき『先祖の

話』の基本性格を理解するという点で、それまでの資料調査は有益であった。これについては、既に公表済みである。

第二の成果としては、1920～21 年にかけて『朝日新聞』に連載された『豆手帖から』『秋風帖』『海南小記』をそれぞれ分析した各論考があげられる。これらのテキストは、従来柳田における「旅と紀行文」の性格を示す一資料として理解されてきたといえるが、本研究では、柳田が全国紙というメディアにおいて、自らのその後の執筆活動における文体や方法を模索した痕跡としてそれらを理解できるという立場にたち、そこで展開された種々の試みを分析した。そしてそこから、柳田における研究者に限定されない匿名多数の読者へむけた言葉の戦略の試行プロセスを跡付け、更に本研究課題のテーマである、柳田の表現がもつ「現代的意義」までを浮き彫りにすることを試みた。これらの論考については、令和 4 年度にかけて順次公表できる予定である。

上記の成果に関して共通する特質としては、読み手の能動性が発揮される余地を保ち、読み手に思考と発話の主導権を譲りつつこれからの実践につながる思考の当事者となるよう促す点を指摘することができる。そしてそのようなことを明らかにした本研究がもつ学術的な意義については、次の三点をあげられよう。

（1）柳田のテキストに関して、その内容と不可分なものとして形式面の検討を行うことの意義を提示できた点。

（2）柳田のテキストの検討を通じて、文学研究の視点や方法論を、従来別分野と理解されてきた著作家のテキストに適用することで新たな価値を見出せることを示した点。

（3）柳田のテキストがもつ現代的意義の基盤を、書き手の意図の反映として完結させない文章の作り方に求められることを示した点。

また、以上のような検討成果を導く過程で明らかにできたこととしては、柳田の「言語観」のうち、表現の定型に関するスタンスについて、それを重視することが柳田において必ずしも最重要な事柄ではなく、より重要なのは定型表現を通過点として、個々の言語使用者に独自な自由意志の発露を可能とさせる点である旨を明らかにできたことがあげられる。加えて「言語観」のうち「考える言葉」に関しては、柳田のテキストにおける類似表現を含めた用例を確認するとともに、その主張と関連し得る教育学、言語学、発達心理学における「内言」（＝心の中の言葉）の研究動向等を通覧し、それらの間の接点を可能な範囲で検討した。その結果、この「考える言葉」とは、柳田の場合、既存の言語習慣や定型表現の無批判的な踏襲ではない、現実状況に対応した表現活動へのステップとして理解すべきものであることも浮き彫りにすることができた。

なお、コロナ禍のために当初の予定通りに完了させることができなかった、柳田国男における表現構造の背景となる諸資料に関する調査と、それに基づく柳田のテキスト全般にわたる論説の中での分節のしかたと、個々の文章レベルにおける事態の検証については今後の課題となる。それらの補足調査と、そこから可能になるテキストの具体的検討を積み重ねていくことで、柳田国男のテキストにおける表現構造の全体像の把握を、今後も継続的にすすめていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 宮崎靖士	４．巻 59(1)
２．論文標題 柳田國男『先祖の話』論 ――構成・表現・同時代状況――	５．発行年 2021年
３．雑誌名 北星学園大学文学部北星論集	６．最初と最後の頁 98,122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関